科目名	Tokyo P-TECHプロジェクト実習							年度	2025
英語科目名	Tokyo P-TECH Project Practice							学期	通年
学科・学年	AIシステム科 1年次	必／選	選P	時間数	60	単位数	2	種別※	実習
担当教員	Tokyo P-TECH関係者、大矢	教員の実務経験		有	実務経験の職種		IT関連職種		

【科目の目的】

最新技術を業界のプロフェッショナルの指導のもとプロジェクト方式で体験し、アウトプットすることを目的とする。多様性が求められる昨今、さまざまな環境にいる人との交流を持つことが多様な価値観を持つ他者への理解につながる。本実習では、Tokyo P-TECH関係者らによる知的好奇心および探求心を刺激するとともに、他者との協働関係または競合関係から想像、発想をカタチ（モノ・コト(サービス)）にする取り組みを体験する。

【科目の概要】

他学科・地域・企業と連携した課題解決や各種コンテストへの出場など、プロジェクト単位の活動を通してチームの役割を学ぶ。なおプロジェクトは期間中に複数回、取り組む計画である。

【到達目標】

地域連携やコンテスト出場を通して、メンバーで成果物を完成させることを目標とする。最後まで成果物を完成させることで、専門技術の向上を目指す。また、プロジェクト活動を通じ、学生間の問題解決力、対話力、合意形成力を身につけ、プロジェクトマネジメントの基礎技術を身につける。

【授業の注意点】

本講義では学生が主体的かつ能動的に学習する姿勢を重視する。レポートは、聴講内容を羅列するだけではなく、自らの考えや新たに学習した事柄について調査および検証した結果等を記載することを求める。講義に出席するだけでなく、社会への移行を前提とした受講マナーで授業に参加することを求める。なお、授業時数の４分の３以上出席しない者は成績評価することができない。

評価基準＝ルーブリック

ルーブリック 評価	レベル５ 優れている		レベル３ ふつう		レベル１ 要努力
到達目標 A	最新技術動向に深く関心を持ち、主体的に勉強会に継続的に参加している		最新技術動向に関心を持ち、勉強会に参加したことがある		最新技術動向に関心を持たず、主体的に勉強会に参加したことがない
到達目標 B	最新技術動向に深く関心を持ち、主体的にカンファレンスに継続的に参加している		最新技術動向に関心を持ち、カンファレンスに参加したことがある		最新技術動向に関心を持たず、主体的にカンファレンスに参加したことがない
到達目標 C	プロジェクト活動を行う上で自らの役割、責務を認識し行動することができる		プロジェクト活動を行う上で自らの役割を認識し行動することができる		プロジェクト活動を行う上で自らの役割や責務を理解することができない
到達目標 D					
到達目標 E					

【教科書】

毎回レジュメ・資料を配布する。参考書・参考資料等は、講義毎に指示する。

【参考資料】

【成績の評価方法・評価基準】

レポート・課題 40% 授業内容の理解度を確認するために実施する
成果発表（口頭・実技） 60% 授業時間内に行われる発表内容について評価する

※種別は講義、実習、演習のいずれかを記入。

科目名	Tokyo P-TECHプロジェクト実習	年度	2025
英語表記	Tokyo P-TECH Project Practice	学期	通年

回数	授業テーマ	各授業の目的		授業内容	到達目標＝修得するスキル	評価方法	自己評価
1	事前調査	テーマにそった知識を調査し、情報を整理することができる	1	調査方法	必要な情報を得るための調査方法を身に着ける	3	
			2	事前調査	テーマに沿った事前知識を習得する		
2	プロジェクト遂行	整理した情報をメンバーと共有するために説明することができる	1	情報整理	調査した情報を整理しまとめる力を身に着ける	3	
			2	対話	調査した情報を他者に効果的に説明・共有できる		
			3	設計製作	プロジェクトにおける自分の役割を実行できる		
3	中間報告会	他者の前で発表し、質疑応答の対応ができる	1	報告書作成	新規性・論理性・実現性について理解する	3	
			2	発表と質疑対応	質疑応答を介して知識を深め、広げることができる		
4	プロジェクト遂行	整理した情報を他者（企業）と共有するために説明することができる	1	情報整理	調査した情報を整理しまとめる力を身に着ける	3	
			2	対話	調査した情報を他者に効果的に説明・共有できる		
			3	設計製作	プロジェクトにおける自分の役割を実行できる		
5	プロジェクト報告会・成果物および報告書のまとめ	自らの体験をもって自信につなげることができる	1	最終報告書作成	これまでの一貫性の確認と更なる発展性について理解する	3	
			2	発表と質疑対応	質疑応答を介して知識を一層深めことができる		
			3	制作・実証検証	失敗や成功の体験を繰り返し目的を達成する		
6							
7							
8							
9							
10							
11							
12							
13							
14							
15							

評価方法：1.小テスト、2.パフォーマンス評価、3.その他

自己評価：S：とてもよくできた、A：よくできた、B：できた、C：少しできなかった、D：まったくできなかった

備考 等